広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	子どもの「夢」の世界構造
Author(s)	武村，昌於
Citation	児童の言語生態研究 , 14 : 13 - 27
Issue Date	1990-11-25
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00045154
Right	
Relation	

特集 あの子にこの子
子どもの個性への接近

子どもの「夢」の世界構造

武村昌於

Ⅰ 夢の世界観の構造認識

我々の「子どもの夢」研究の動機は、「個性」とは何かという問いに対して答えを見付け得る、という直観にあった。それは、子どもは「個性的に夢を見る」のではなく、子どもがどのような夢を見たか、その夢の構造を垣間見れば「個性」も見えてくるとする立場である。実際、自分の見た夢がどんな意味があるのか、それは見た人にとっての「意味」であって、その人自身がその人となりを知るための「意味」である。そこに「個性」が必ず関わってくるとする立場である。

「ゆめの中で、小さい3才ぐらいの子どもが、お母さんとはぐれてまいごになって、一時間見てやったけれど、その子の母親は現れず、警察につれていった。でも警察にくると泣き出した。私はその子が自分に思えてしょうがなく、だから何かしないとと思い、でも私ができることは、その子を本当の母親にもどしてやるか、警察にわたすこと。でも母親をさがすのに、今はポスターを作り、いろいろな所にはり、さがす。」

（高知5年女子）

この作文にあるように、夢を見るとは結局自分を鏡に映し出すことに他ならない。その夢の構造を明らかにするところに個性研究の原点がある。

個性とは、ある人間に於ける人間性の部分ではなく、また特異な面をのみ指すのでもない。むしろその人間を根源から揺り動かしているものがどのように現れているのか、またその根源的なものがその人にどのような方向性を与えているのか、というふうに、人間の魂の問題として、いのちの発露として個性を捉えていくことが個性研究の第一歩と考えているのである。

夢には、その「根源的なもの」（魂やいのち）の指示し、発露する方向があからさまに現れる。従ってその人の夢の構造を見れば、その人の基本的な行動や情動を規定している最も「根源的なもの」の無意識世界を見ることができるのではなかろうか。その意味で、夢は無意識世界の世界認識（世界観）であり、我々は夢作文の分析を通して、その「無意識世界の世界構造」の組み立て方を見ようとするのである。

さらに、夢の世界構造を明らかにするとは、「夢自体の働き」を明らかにすることでもある。今回の研究を通して、我々は、「夢自体の働き」として夢を構成する要素に大変な片寄りがあることを見出した。つまり夢は、普遍的で一般的な世界ではなく、多分に偏向的で特殊な世界なのである。それ故に、夢は特殊な行動や動作を伴って認識されるものと言えるのである。

夢作文の分析は、「夢自体の働き」としての夢の構成要素を、各作文の中から項目として抽出する作業から始まった。例えば5年生（玉川）の作文での抽出作業は次のようである。

「僕の見たこわい夢は、家族といっしょにべっそうに行った時、僕は二階でねていて、その間にいとこたちは東京へ帰ってしまって、僕はお母さんが来

年また来るまでまって、ベッドの近くにあるドアを開けたらもう外につながっていて、おっこちる寸前に起こされました。面白い夢は、朝ごろに夢を見る時、あるおじさんがしゃべっていて、朝起きてみたら、ラジオの声だったりこどもがしゃべっている。声は、弟の声だったりしました。不思議な夢は、四次元の世界に行ったことや、弟の体の中に入ったことや、弟がたくさん出てきたことでした。僕の夢の中で弟がけがをすると、起きてみると本当に弟がけがをしていました。

この作文からは次のような項目を拾い上げることができる。

●扉(ドア)・落ちる・声・四次元の世界・体の中へ入る・正夢

というようになる。同じように他の作文からは、

●正夢・異類出現・変身・穴・食べられる
●がけ・落ちる・死ぬ・変身
●異類出現・追われる・孤立
●願望・空・階段・飛ぶ・おまじない
●道・はてしない・方向指示
●願望・死ぬ・変身・乗り移る

といった要素を挙げることができた。これらのことから明らかなように、夢を構成する要素は大変片寄りがあると言える。これらの要素を大きな項目ごとに整理したものが次の「夢の作文構成的要素分類表」である。

更にこれらの大きな項目は、「次元」と「構造」という二つの柱立てによって分類されることが明らかになってきた。つまり、夢の世界構造の認識は、「次元」の意識と「構造」の意識とによって構成されており、夢を見るとは、この「次元」と「構造」という二面性を併せ持っているということである。

「次元」の意識とは、夢の世界構造をどこに設定しようとするかの意識であり、「構造」の意識とは、夢の世界構造がどのように組み立てられているかの意識である。夢は、初めに夢を見たとする場所から必ず動いていく。それは、自分の夢の世界を設定しようとするからである。それはまた、隣り合わせた世界を意識することでもあり、自分の夢の境界領域を定めようとすることでもある。作文例を挙げる。

「この夢は、私が小さかった頃に見た夢です。でも、全然忘れられないので、この作文に書きます。幼稚園の時、前の家で私がねている所から、この夢は

「夢」作文に見る夢の構成図

構造	次元
行動・動作	骨肉食餌
体感	願望
身体欠陥・身体欠損	阻止・疎外
身体喪失・身体象徴	障壁
発想形式	閉鎖
素材	効能

児童の言語生態研究会による

夢の作文構成的要素分類表

構造

- 構造
  - 方向指示・案内・入口出口・移動・底無し・背後・彼我関係・観察者・永遠・連続・夢の中の夢・排泄・出会い・鏡に写る・青い瓦肌色の壁
- 行動動作
  - 追う追われる・襲う襲われる・刺す刺される・殺す殺される・助かる助からない・流す流される・逃げる・転ぶ・飛ぶ・昇る・落ちる・飛び降りる・隠れる・覗き込む・降り掛かる・食べられる・飲み込む・すり抜ける・消える・まばたきをする
- 体感
  - かなしばりになる・お腹の中をずっと行く・飲み込まれる・吸い込まれる・スローモーション・揺れる・迷う・浮遊感覚・体の大きさの変化・気絶する・体がバラバラ・重い物で潰される・体の中に入る
- 身体欠陥・身体欠損
  - 目が一つ・足がいっぱい・言葉が話せない・息が吸えない・牽かれる・首（指）が切れる・頭に青い斑点が見える

身体喪失・身体象徴――脳が替えられる

次元

次元――境界意識・あの世とこの世・地下・戻る(甦る)・転生・回る(転換)・変身・異類出現(ちん入)・変事・未来・魔王・魔界・妖精の世界・不思議な世界・花畑・虹・白と黒・四次元の世界・はてしない・死ぬ

骨肉食餌――骨肉食餌(肉親)

願望――正夢・悪夢・教えられる・照合

効能――お告げ・まじない・呪文・呪われる・タブー・おかすおかされる・乗り移る・石にされる・試練・人さらい・人格交換・身代わり

阻止・疎外――わな

障壁――壁

閉鎖――檻・檻獄・お化け屋敷・孤立・脱出

「構造」「次元」以外

発想(文章)形式――質問・繰り返し・完結(必ず~する)・~はず・~たら・~のに・~ので・いきなり・いつのまにか・そこら中・~まみれ・いっぱい・~だらけ

素材――血・音・声
柱・お城・塔(タワー)・ビル・ホテル・崖・かくれんぼ・鬼ごっこ・風船・駅
蛇・縄・網・火の鳥・ワニ・コウモリ・恐竜
水・川・噴水・湖・海・海底・空・砂漠・
道・分かれ道・ずっと続く道・坂道・抜け道・迷路・階段・行き止まり・橋・扉・門
乗り物・ブランコ
天井・窓・穴・棺桶・蟻地獄・体の中・筒・ふた
鏡・神様・人魂・悪魔・魔女・お化け・姫・小人・どろぼう
マーク(しるし)・人形(市松・わら)・仮面・お面・顔・眼
闇(真っ暗)・真夜中・満月の夜
雲の上・霧・煙・雷(稲妻)・雨・火事
森・トイレ・知らない家・引っ越し・時計・ナイフ・包丁

始まるのです。ねていて、夢を見ています。その夢は、自分が全然ちがう家でねていて、まばたきをすると、元の家にもどっているのです。そして、その夢の夢からさめて、横を見ると、ねているはずの母と父がいません。家の中を見てもいないのです。そこで、私が泣くと「雅子」と母によばれてやっと起きました。だから私は、夢の夢からさめた夢を見ていたのです。自分がおきざりにされたのかと思って泣きました。」

(玉川6年女子)

この作文では「まばたき」をすることによって、「自分の家」の領域と「前の家」の領域を行ったり来たりしながら(つまり「次元」を越えて)、境界領域を設定している。そしてまた、「まばたき」という動作や「夢の中の夢」といった「夢の構造(がどのように組み立てられているか)」の面も指摘することができる。このように夢の世界は、「次元」と「構造」の両面を併せ持っているが、更に次のようにまとめることができる。

(1)「次元」は「夢の中」にいる意識であり、「構造」は、夢を客観的に見ようとする意識である。

(2)「次元」は、夢を「意味のある世界」として見ようとする意識であり、「構造」は、夢の中で行動する意識、夢の中の出来事を「現実思考」として見ようとする意識である。

(3)「次元」は「夢の中」に「夢を見て

いる意味」を感じ取ろうとする意識であり、「構造」は、「現実思考」で夢を客観的に説明しようとする意識である。

これらの観点から、「夢の作文構成的要素分類表」を再度まとめ直したものが、前々頁の「夢の構成図」である。「発想形式」は、夢の「次元」や「構造」の発想が文章表現としてどのように表れているかを示したものであり、「素材」は、夢の「次元」や「構造」を組み立てている素材を表したものである。従って「発想形式」と「素材」は、「次元」や「構造」を構成する基本的な要素と言える。

2 夢の境界領域の認識

古来日本人は、「うち」と「そと」、「こちら」と「あちら」というように、境界領域というものに対して敏感であった。日本に仏教思想が入り込んできた時に、極楽は「あめ」に、地獄は「よみ」にというイメージで自然に受け入れたに違いない。現在でも「うちの子どもは」「よその子どもは」とか、「うちの会社は」「よその会社は」とか何気無く使っている。このハイテクノロジーの進んだ現代であっても、日本人の精神世界は古代とあまり変わりがないと言ってもおかしくはない。

日本の神話の中では、この世とあの世とは必ず岩や川などで隔てられ、あの世へ行くには地下の道や穴を通ったり、舟や橋が設定されていたりする。このような境界領域の意識がそのまま現代の子どもにあてはまるわけではないが、それでも例えば「扉」（ドア）、「鏡」、「階段」、「ずっと続く道」、「穴」などの「素材」に古代からの境界領域の意識を垣間見ることができる。

●「扉」

「家のトイレは一つしかないのに、私が行くと四つとびらがある。お母さんが行くと一つしかない。また私が行くと、四つある。（相模付属4年女子）

●「鏡」「階段」

「ある時、ピアノをひいていたら、後ろの鏡にすいこまれてしまった。そして落ちていた紙きれには、「魔王をたおして姫を助けると元の世界にもどれる。」と書いてあった。そして歩いて城へ行き、階段があって登ると魔女がいた。魔女に魔王の所に案内してもらって魔王をたおした。」

（相模付属5年男子）

●「鏡」

「僕の一番面白かった夢は、鏡の中に入りこんでいく夢です。そこで会った人たちはみんな同じ顔で、母や父や姉たちもみんな同じ顔の世界です。だけど性かくがまるっきり反対で、そこでは、右が左で、左が右で、上が下で、下が上ですごくへんなゆめでした。）

（高知5年男子）

●「ずっと続く道」「橋」「分かれ道」

「ぼくがあそんでいたら、いきなりきょうりゅうのいるせかいにきて、そこにながいながいみちがあって、そこをずうっとおくにいったら、まだまだみちはつづいて、どんどんいったら、はしがあり、そこをとおっていったら、はしから出たときは、もうはしはきえてなくなっていた。そしてまえを見たら、大きなきょうりゅうがいて、そこのみちをふさいで、そこの大きなきょうりゅうをこえなきゃ、さきへさきへいけない。どうかして、きょうりゅうをどかさなきゃいけない。どうしよう、そうだ。大きなきょうりゅうの上にのっていけばいいんだ。そうしてぼくは、大きなきょうりゅうの上にのっていったとたん、大きなきょうりゅうがうごき出し、ぼくはまっさかさまになっておっこちた。きょうりゅうがぼくのあとをついてきて、ずうっとずうっとついてきて、わかれみちがあって、その大きなきょうりゅうが「みちあんないしてあげよう」といった。

（成瀬台1年男子）

この作文のように、「分かれ道」に来ると、「道案内」（構造）があるとする夢はかなり多い。これはどちらの道を選択するかといった時、神様の「お告げ」（効能）を聞くことによって方向指示がなされていると考えられる。つまり「夢を見る」とは、「神様のお告げを聞く」ことを多分に暗示しているのではないか、ということを表している。逆に言うと、お告げを聞くために夢を見るのだ、と言えなくもない。もう一つ「分かれ道」の例を挙げる。

●「分かれ道」「道案内」「出口」

「おばけやしきに入って、下からへびが出てきて、雨が血になっていて、走っていったら血の海で、べとべとのものが上から頭にかかってきて、ゆらゆらになってにげたら、女の人が「早くこっちににげなさい。」と言ったので、そこへにげたら、二つの道に分かれていて、右に行ったら出口があって、お父さんとお母さんに会っていっしょにおうちにかえりました。」

（相模付属2年女子）

この作文では、分かれ道での方向指示ではないが、分かれ道の前に、女の人の「道案内」がある。そしてその境界領域からの出口を見付けることによって、こちら側の世界に戻ることが出来たと言うのである。つまり境界領域が意識されるからこそ、「出口」もまた強く意識されることになる。

「境界領域」と「出口」の意識は、「迷路」を素材とした作文にも次のように表れている。

「むかしの夢のことです。私とお母さんは、遊園地の迷路の中にいました。

なかなか出口がありません。そして、二人以外の人間はいませんでした。とっても暗い所を、二人は出口をさがしていました。

いくら行っても出口はないし、人間は一人もいませんでした。私とお母さんはこまりました。そして、上に上る階段を上ったら、コーヒーショップに着きました。やっと二人は迷路を出たのです。」（聖徳4年女子）

迷路の中が「とっても暗い所」とするイメージは、そこが「黄泉の国」だとするイメージと重なってはいないだろうか。同時に、黄泉の国では、迷路の中のように、「さまよう」所であり、そのおぞましい世界から逃れるためにも、出口は必ず設定されなければならないのだろう。

「道」に付随して、「坂道」も境界領域意識の重要な素材である。

●「坂道」

「長さ百五十メートルぐらいの急な坂道をころげ落ちて、やみの世界へ行ってしまった。」（相模付属5年女子）

やみの世界（黄泉の世界か）への境界領域に、「坂道」を通過するイメージは、「古事記」におけるイザナギの黄泉への行程と重なってくる。

次に、「穴」もまた、境界領域意識の重要な素材である。「穴に落ちる」ことによって、別の世界へ入ってしまうとするイメージは、各学年にわたって作文例の中に見ることができる。

「私のゆめは、わからないけど、夜キャンプへ行ってかぞくと友だちと行きました。その友だちのひとりがまだきていませんでした。だから私がさがしにいきました。いなかったから、かえりました。でもとちゅうで、あなは見えないけど、すとんとおっこちてしまうゆめで、その中にその友だちがいました。」（玉川2年女子）

この例では「別の世界」の境界領域が意識されているかどうかは不明だが、友だちを「穴」の中に見付けたとするところに、「穴」に対する特別なイメージがあることを裏づけている。

次に、「覗く」という行為が境界領域の意識と関連していると思われる例を挙げる。

「公園であそんでたら、大きい犬がおいかけてきて、大いそぎで家に帰って二かいのまどからのぞいたら、まだその大きい犬がほえていて、ドアをあけたら、その犬が小さくてかわいい犬になっていて、また二かいからのぞくと、大きい犬で、またドアから見てみると小さくて、ずっとドアをあけて見てたら、犬が二ひきいて、おどろいた。」（相模付属2年男子）

この例は、前に挙げたドア（扉）による境界領域意識と同じであるが、この「窓」も、この子にとっては恐らく「扉」と同じであったに違いない。「窓」も開けてしまっては「別の世界」へ入ってしまうのであって、あくまでも「覗く」ことによって、自分が「この世」にとどまっていられるに違いない。従って前に「鏡」の例で挙げたように、「吸いこまれ」たりしないように窓を少しだけ開けていたのだろう。また、「別の世界」では、「大きい犬」が「小さい犬」に「変身」してしまうのが面白い。つまり「別の世界」には人知の及ばない「威力」があることを知っているのであり、「一寸法師」もこのような世界だったに違いない。

このことと関連して、「別の世界」では「異類」が出現することが多い。

「おらおらおじさんは、ゆめの中ではわたしのとなりの人です。わたしの家に五個くらいのドアがあって、その戸の前に人がきて、「おはようございます」とか「こんにちは」とかあいさつをすると、いろんなものが出てきて、あいさつのしかたがわるいと、水やおらおらおじさんが出てきて、「おらおら」と言ってきます。わたしとお姉ちゃんでおらおらおじさんの家のまどからのぞいて、小鳥や小犬や小ねこを見ると、またおらおらおじさんがきて、「おらおら」と言ってきます。そしてやさしい時は、おじさんはいつもにこにこしています。わたしはそんなおらおらおじさんが、ほんとにとなりにすんでる人だったらいいな、と思います。」（川崎東小田5年女子）

この「おらおらおじさん」の例を始めとして、「知らない女の子」が出現したり、「風の又三郎」のように、学校に「転入生」として現れたりする。

次に、現代の子どもは、「別の世界」を「異次元世界」、とりわけ「四次元世界」として捉えることが多い。

「夢の中で僕はある町を作った。それは、自分だけの町だった。本屋がある。その本屋は畳一畳しかなかった。しかも本が無い。けれども、「あれ下さい。」と言うと、その本が僕の手ににぎられる。こんどはおもちゃ屋に行くと、そこも畳一畳しかなかった。そしてまた「あれ下さい。」と言うと、ほしいおもちゃがすぐ出てくる。僕はたくさんもらっていきました。店を出ると、あたりの景色がまっ白で、他は何もありませんでした。友達を呼んで、いろんなことをして遊びました。たくさん遊んでおもしろくて、四次元部屋へ行ったら、周りが白で、ゆかが無く、自分が浮いていました。そこでは、ミニ四駆も走り、おかしいな、と思いました。本やマンガ、雑誌を読みまくりました。何でもスキにやれて、遊び、また時間に限りがない世界があったらいいなあと思いました。」（聖徳4年男子）

「別の世界」はまた、「天国」や「極楽浄土」の世界でもある。そしてその願望は、「お花畑」と結び付いていることが多い。

●（題名）私はこの国のお姫様

「私がたしか4才のころでした。その夜お母さんに、「いい夢を見てね。」と言われて、私は思いました。（そうだなあ。いい夢っていったら、どんな夢かなあ。お金持ちになってごうかなお城に住んでみる。そういうのもいいなあ。）と思っていたら、なぜかいつのまにかねむってしまいました。

私は何かきれいな国に来ていました。そこは細い細い道でした。しかしまわりは花園だらけで、永遠に続きそうな道でした。私は、

「何、ここ。この道ずっと歩いていたら死んじゃうよう。」と思っていたら、横になんと馬が、じゃない、馬車が、それに人も乗っています。私はその馬車に乗ってみました。するとその人は、馬車を走らせました。私はその人に、

「ねえ、これ、どこに行くの？」

するとしばらくして、その人は答えました。

「この先の花園王国の、花園王子の住む、花園城でございます。」

「えっ、えっ？ そんなあ、私、帰らなきゃいけないのに。私、困る。」

と言っているうちに、その花園城という所についてしまったようです。目の前に城があるのはともかく、まわりは花、花、花だらけ。馬車はお城に入り、まもなく馬車は止まりました。そして馬車に乗っていた人がりっぱなふくをきて、

「お姫様、お食事の時間でございます。」

そして私はしかたなくなんだか知らない部屋につれられてきて、その部屋に入ると、

「パーンパカパカパーン、パカパカ」

と音楽が鳴り、食事が始まりました。私はなぜか、お姫様の気分になりきったところでお母さんの声がして

「早く起きなさい。幼ち園におくれるわよ」

と言われて、ガバッと起きて、あわてて幼ち園に行きました。その日はルンルン気分でした。」（聖徳4年女子）

「夢見る少女」などと言われるが、まさにこの子は「夢見心地」でいたに違いない。それによって一日ルンルン気分でいられるのだから、こんなに楽しいことはあるまい。しかし、もしかしたら、この子は、現実に生きている状態そのものが「夢見心地」であったからこそ、「夢にまで見た」のではなかろうか。

「私が、月だ！女神だ！太陽だ！とさわがれる時代が来る夢を見た。（自分はどうしていたか）ひらひらのドレスを着て、べかべかのいすにすわって、ふんぞりかえり、高わらいしていた。（自分はどうされていたか）「女神」だと、あがめられていた。（そのときの気持ち）「こりゃ、えーわ」

（高知5年女子）

このようにイメージを持つことが楽しいのは、「人のもの」「仮のもの」ではなく、「自分のもの」であるからに違いない。従って、夢の中に神様が出てこなくても、自分が神様になればいい（勿論、神様の出てくる夢もある）のである。

●（題名）み～んなみ～んな夢

「私は、神様の夢の中の人物なのだ。たとえば、私なら私の神様の夢なのです。そして、私たちの周りの物も、地球もみんなまぼろしなのです。なぜ、私がそんな事に気付いたかは、このあと説明します。

「地球は出来た時は、水、緑、海、花、土、石などしかなかったのに、今は、トラックもある。なぜだろう。」と思ったからである。不思議な物を見ると、いつもこう思います。私たちが死ぬ時は、その神様の夢が終わる時なのです。」

（聖徳4年女子）

この作文は、「次元」の中の「願望」というよりは夢の仕組みを言い当てている「構造」の面が強く出ている。従って夢を楽しんでいるわけではない。しかし現実の世界が「まぼろし」であるとする意識が何故出てきたのだろうか。織田信長の「下天は夢」とする直観が既に生まれてきているのだろうか。次のような6年生の作文もある。

「僕は、はっきり言って、夢かどうか、わからないことがよくある方だと思う。よく、歩いていると「夢じゃないかなあ」なんて思ったりする。でも5分ぐらいそんなことを思っていると、「ちがう、ちがう」と思えてくる。僕はよくそんな経験をする。」

（玉川6年男子）

「境界領域」の意識の問題から、多岐に派生してしまったが、「あの世」「別の世界」「異次元の世界」と言ったように、夢が特殊な「世界」を設定し、そして、その世界を行き来するために、夢の仕組みそのものが、「境界領域」を問題にしていることが明らかになってきた。そして、その夢の世界観が個人によって「特殊」なものであるというところに、「個性」を伺い知る手がかりのようなものを得た。

そして、その境界領域に「入る」「吸い込まれる」「落ちる」ことと、「出る」「戻る」ことは常に意識されているのである。このような仕組みを持つ夢の世界構造が、「次元」と「構造」という二面性を持つことは前に述べた通りである。

3 夢における「彼我関係」意識

夢の仕組みについて、「境界領域」と共に我々が注目したのは、「彼我関係」意識である。特に、夢の中の「追う追われる」「つかまえるつかまる」といった能動者と受動者との関係、また、自分と他者との関わり方がどう意

識されているか、という点についてである。何故なら、これらの表れ方によって、夢の世界構造が、ある程度、規定されてくるからである。

「ぼくの心にひっついている夢は、おばあちゃんと家族で船に乗って旅行に行き、船から出たら、外は田んぼになっていて、おりたしゅんかんに船が出発し、おばあちゃんだけが船に乗って、ほほえみながら手をふっていた。ふりむくと、お母さんたちが向こうへ走っていっている。ぼくは、追いかけた。追いかけても追いかけても追いつかない。くたびれてすわると、夜になり、一人だけですわっていた。」

（高知5年男子）

この作文の当事者は、一応「追う」側に立っているが、置き去りにされているのは自分であるから、実際は「追う」側ではない。

実は、「追う」側の作文は、全くと言っていいくらい無く、「追われる」側の作文がほとんどであったのである。つまり夢の世界では、自分がたとえ神様と一体となったとしても「追う」側にはならず、「追われる」側なのである。

「近所の魚屋さんの所から、変な気持ちの悪い顔のおばあさんのような人が私を追いかけてくるんです。どうしてか、「ゆき、まてえ！」というふうにさけびながら走ってくるんです。それは夜中で、人通りがなく私が「たすけてえ！」と大声でさけんでも、近くの家の人は、だれも起きてくれない。車も通らない。

魚屋さんの所には、なぜか生ごみを捨てていて、毎日その夢を見ているのに、全然どこも変わらないのです。

その近くにおばあちゃんちがあるので、そこへ走っていこうとすると、おばあちゃんちがないのです。それであわててにげて行くと、なぜか、またもとの場所にもどっていて、にげても、にげても、またもとの場所に来て、私が殺されそうになる夢を、二年間もずっとわすれなくて、まどから外を見ようとすると、ガラスにそのおばあさんのような人の顔がうかんでくるんです。それが、こわくてこわくて、たまりませんでした。目をつぶると、その人が出てくるんです。

一年生の時に見たのに、今でもはっきりと覚えています。」

（高知5年女子）

以上の二つの作文のように、「追いかけられる」とする意識が強い作文はかなり多い。そして、「お母さん」や「おばあちゃん」といった家族が自分と共に出てくるものが多い。また、自分と親しい友達も次の作文のように頻繁に出てくる。

●（作文題）こわいゆめ

「ぼくはゆめをみました。はじめに、ならくんとぼくが、かいだんからにげてると、てらちくんのおばさんが、ならくんとぼくをつかまえようとして、ならくんがつかまって、ぼくはにげていきました。」

（成瀬台2年男子）

ところが、低学年の中には、受動と能動とが逆転するものがある。

「まじょとおばけが出てきて、梨沙（自分）をおそいました。梨沙は、けんとやりとたてとまほうのつえをもっていました。さいしょにおばけがおそってきました。おばけはけんをもっていました。そして梨沙の足をおそってきました。でも梨沙が少しジャンプしたらけんはいわにささってしまいました。そしてわたしはまほうのつえで、「このおばけをひと玉にしたまえ」って言うと、おばけはひと玉になってしまいました。そしてどっかにとんで行ってしまいました。

つぎはまじょがおそってきました。まじょはまほうのつえをもっていました。そして、まほうのつえに「こいつを石にしたまえ」って言いました。でも言うまえにわたしは、けんでまほうのつえをとばしてしまいました。そしてけんでま女をさしました。それでま女はしにました。」

（聖徳2年女子）

このような例は、中学年、高学年には見られないのであるが、中には、「自分が自分に襲われる」というのがある。

「クローン人間とは、ある人の一つの細胞を育ててできた、その人そっくりの人間のことです。僕はその夢の中では科学者になっていました。真っ白い服を着ていて、ダブダブの長ズボンをはいて、どちらかというと、あまりしまってはいませんでした。それはともかく、これからおそろしい実験が始まるのです。

容器に入っていた細胞がどんどん人の形に変わっていって、僕そっくりの人間になったのです。そこまではいいんですが、その僕たちが容器をこわして、どやどやと僕におそいかかってきたので、頭が混乱してしまって、とうとう自分におさえつけられてしまいました。僕は苦しくって、思わず目をつぶってしまいました。」

（玉川5年男子）

この作文の中の恐ろしさは、自分の魂が他の物に乗り移ってしまう、言わば「人格交換」の故であろう。しかし「人格交換」は、恐ろしさばかりでなく、次の作文のように、夢自体が「効能」を表しているに違いない。

「僕はお使いに行く時に車にはねられて死んでしまいそして僕は、家族に会いたくなって家へ行きました。その時は食事をしていました。そこへ僕は妹にのりうつり、お母さんに色々と妹を使って話しました。」（玉川5年男子）

「人格交換」の問題は後に述べるとして、自分との関わりにおいて、家族や友達が登場することは、夢作文の特徴と言えるだろう。

「いつもゆめ見ると、わたしのゆめに

いつもこのみちゃんが出てくるの。ときどきゆめ見ると、うちゅう人とか、おりとか、どろぼうが出てくるよ。」

（成瀬台1年女子）

「わたしのしんだおじいちゃんがでてきたから、うれしくって、だきついちゃった。ふとんの上で、たかいたかいをやってもらった。ゆめじゃなかったらよかったな。」（成瀬台2年女子）

「わたしはきょう、山田さんといとうさんと田村さんが出てくるゆめを見ました。とてもたのしいゆめでした。どういうゆめかというと、わたしと山田さんといとうさんと田村さんで花火をまわしているとき、花火が出そうになったから、前、うしろにわかれました。山田さん一人が前、わたし、いとうさん、田村さんがうしろにいきました。そのとき、花火からおうちが出てきて、そこでくらしておわり、というゆめでした。」

（成瀬台2年女子）

友達との関係でも、高学年になると、普段の人間関係が役影されてくる。

「ぼくと河村君でいっしょに学校から帰っていて、大きな池の前でケンカをした。いろいろなぐったり、けったりした。また、けられたり、けり返されたりした。ぼくが河村君の名札を取った。河村君は「名ふだをかえせ。」と言った。ぼくは、「返してほしかったら、池にとびこめ」と言った。河村君は「ああ、とびこんでやる」と言い、とびこんだ。それから間もなくして、「ザパーン」と河村君がスーパーマンになってでてきた。その河村君は、すごくかっこよくて、「すげえな」と思いました。そのまま見ているうちに、河村君は空へ行ってしまった。」

（山口5年男子）

「ゆめの中で、ぼくはピッチャーですごく球が速くてみんな三しんばかり取っていました。そしてバッティングでも四番を打っていて、ホームランをどんどん打っていました。ところが、ある時、勝本君にホームランを打たれました。それで気を落としたのか、どんどん打たれるようになりました。それから勝てなくなって、ある時、「お前はくびだあ」と言われて飛び起きました。起きた時、「本当じゃなくてよかったあ。」と思いました。」

（山口6年男子）

次のような家族や友達がいなくなってしまった場合の孤独感は、自分との関わりにおける彼我関係意識の裏面を表していると言えるだろう。

「僕の見た夢の中で、最もこわかった夢は、お母さんやお姉さんが空へ飛んでいってしまって、僕一人ぼっちで生活していく夢でした。国民年金、新聞の集金、ガス代、水道代、お金に関することがどんどん出てきて、とうとう僕のおこずかいだけになってしまいました。そしてしまいには、はさんしてしまいました。僕はそんな生活がいやになり、「お母さん、お姉さん」と泣いていたら、へんながいこつが「お母さんはここよ。」と言って、僕が世界中をにげ回り、とうとう今度はミイラ、ドラキュラみたいなのに追いかけられて、とうとうミイラたちはへとへとになって、死んでいって、地面を見たらミイラたちの死体ができていた夢です。」

（玉川5年男子）

4 「構造」の中の夢の要素

先に、夢の仕組みの組み立てには、「構造」と「次元」と言う二つの柱があると述べたが、一方の柱の「構造」の中の、その組み立て要素としての特徴的なものを次に挙げることにしたい。

(1)「夢の中の夢」

前述したように「構造」は、「現実思考」で、夢を客観的に説明しようとする意識であると言える。従って、自分で夢を見ながら、その中でまた夢を見ているという意識も働くのである。

「ゆめの中で、これがゆめか、というのがわかったことがある。だれかがナイフを持ってきて、おそってきたけど、これはゆめだからだいじょうぶと、思ってささった。ちょっといたかった。それからすぐにびっくりしておきた。」

（高知5年男子）

「私が夢の中で、自分の部屋ですわっていたら、いきなり目の前が真っ暗になって、しらない所にきました。そこから私がまっすぐに歩いていったら、こわーい、こわーい女の人が、首などにへびを巻いて、女の人の周りには、何十、何百というへびがいて、女の人もふくめて、みんなで私の方を見ていました。でもそれは、夢の中の夢でした。目が覚めたら、外に行きました。そしたら本当にその女の人がいました。私はこわくなって走りはじめました。ずーっと走っていたら、きっ茶店があったので、かけこんだら、私の知り合いがいて、その人とその人の友達が私の話をしていました。その話の内容は、私が、今、夢の中で体験したことでした。

家に帰って、私がひとりぼっちになると、又、目の前が、真っ暗になって、女の人とへびたちがあらわれました。そのへびの中でも、最も大きいへびが私に近よってきて、私の首にかみつきました。そのとたん、私は悪魔の血が入ったように思いました。そして、きっ茶店で会った私の知り合いと、その人の友達をころして、どうのこうので、私も死んでしまったという話です。私が死ぬ時は、その女の人は「よく殺してくれた」と言って、私を殺したのです。本当の夢からさめたら、私は、本当に半分泣いていました。」

（玉川6年女子）

このように、自分が夢を見ながら今「夢の中にいる」という意識は、現実

の生活の中でもあるに違いない。つまり、現実感覚の中にいながら、「自分は今夢を見ているのだ」という意識である。よく、本を読みながら「夢想する」と言うが、これもまた「夢の中の夢」と同じなのかもしれない。

「わたしが一番好きな本を何回も読んでいたら、うとうとしてねていると、わたしの好きな本の中でねていました。わたしは、起き上がって、森の中を歩き回っていて、その近くに、少し小さい家があって、周りはかわいらしい動物と虫、きれいな花がさいていたりしました。

その時わたしは、ああ、いま本の中にいるんだという感じがしました。その時、とっても楽しくて、うれしいような気持ちになって、おどりまわっているようでした。ふしぎのような気持ちでした。」（山口5年女子）

一方、「夢を見ている意識」を次のように説明している作文もある。

「私はよく、小さいころから同じ夢を見るのです。その夢とは、夢だと思っていない、思えないというか、まるで、自分の魂と体がそのまま夢に入り込んでいると言っていいくらい、つねると本当にいたいと感じるのです。その夢とは何か。私は空中にういていて、私の下は、何かやわらかい物と固い物が混ぜ合わさったような感じで、さわったり座ったりしても、全然いたくもない。そしてしばらく立っていると、何か後ろから大きな物がころがってきて、アナウンスが流れてきた。「その下のすごく固いダイヤを全部そろえなさい。」その瞬間、下にあった物が全部ダイヤに変わっていった。そのとたん、後ろから急にさっきの大きな物が速度を速めて来た。というところでいつも目が覚める。」（茨城6年女子）

(2)「飛ぶ」と「浮遊感覚」

次に前の作文の中にもあるように、「行動・動作」としての「飛ぶ」または「体感」としての「浮遊感覚」が特徴的なものとして挙げられる。

「私はずっと前に飛んだゆめを見ました。いきなり体がふわふわうかんで、はねがはえてきたような、すごくいい気もちでした。またこんなゆめを見るなら、まちどおしいです。」（玉川2年女子）

「ゆめを見た。わたしがうちのつくえの上をとんだゆめだった。でんきにぶつかりそうで、あぶなかった。おかあさんがだいどころでケーキを作っていた。おばあちゃんはてんぷらを作っていた。わたしはずっととんでいた。」（成瀬台2年女子）

「いつの間にか、しらない所にいて、しらない人がおってくるので、なんのことかわからないけど、にげないといけないな、と思ってにげていくうちに、おってくる人もいなくなって、あたりを見回すと、そこはしっている所だったので、ほっとして歩いていたら、そこは少し高い所だったので、ちょっと足をすべらしました。おちるしゅんかん、私はあせって、空気を水と思って平泳ぎをしました。すると体が宙にうかんだので、びっくりして、泳ぐのをやめたら落ちそうになるので、ずっと泳いでいました。うかんでいても、低いので、だれかが電しんぼうに登って足を持ちました。びっくりしたので目を開けてみると、ベッドからおちていました。」（山口5年女子）

この三つの作文のように、「飛ぶ」という行動が、即「落ちる」ということと結び付かない例があることは興味深い。勿論、「飛ぶ」ということが、「落ちる」に結び付く作文例は多いのだが、それと同じ数ほど「飛ぶ」のが「楽しい」としている作文は多いのである。

「ぼくは真夜中、家を出た。見なれた町なみだ。でも町のはずれに向かっていく。そして知らない町へ出た。風がヒューヒューふいている。でも走った。気付いたら、はだしであった。そしてある丘にたどりついた。その丘の上には「夢、せいぞう工場」と書いてあった。とても見すぼらしい家だった。でも入っていった。そしたらなんと、まどからはただ月一つ。それが五十倍位の大きさだ。そして家の中は、おじさんとぼくだけ。一台だけ機械のような物がある。そしてそのしゅんかん、ぼくは飛んだ。月に向かって。そしていろんな所に飛んだ。でも不安でいっぱいだった。そしてなつかしいようちえんに着いた。そして中に入ったとたん、水があふれた。それも入り口から外の所だ。そして泳ぎに泳いだ。とても楽しかった。さっきの不安なんかふっとんでいた。」（玉川6年男子）

「飛ぶ」または「空を泳ぐ」時の「浮遊感覚」は、「次元」の面から言えば、「境界領域」を越えようとする意識である。しかし以上の作文でも、丹念に読んでいくと分かるように、飛びながら、机の上や台所、月やなつかしい幼稚園といった境界領域をやはり設定しているのである。そしてその境界領域を飛んでいる時には、実際の「体感」として飛んでいるのである。従って、玉川の六年生は作文の最後に「本当に飛んでて、本当に泳いでいた気持ち」と書いているのであろう。

(3)「かなしばり」

夢の中で、体感としてかなしばりに合うという作文も夢の「構造」の要素として特徴的である。

「真夜中、夢の中の私は、その日の私と同じようにすぐごはんを食べてねた。夢の中で見た夜は、世界中のみんながどこかにいっていなくて、会うのはみんな幽霊ばかり。すごくこわくて死にそうだった。いきなり地面から手が出てきたり、シャワーから出てきた

りして、いっその事、私も幽霊の仲間入りしたいと思ったほどだ。夢の中の夜の私は、トイレに行った。本当だったら妹をつれていくけど、妹もいなかったので、一人で行った。手を洗うとき、鏡の前に立ったら、変な顔の私が映っていた。その顔はしゃべった。私の声で「キャーだれか助けて」私は死ぬ時の顔だと思いこわかった。トイレに行ってもう一回ねたら、かなしばりにあって、体が動かなかった。その時に目ざましが鳴って起きた。起きたらお母さんがいたので、うれしかった。」

（聖徳5年女子）

この作文例では、ちょっと意識過剰のような気がするが、かなしばりに会うことを「体感」として実感されることが相当意識されていることは間違いない。

●（作文題）ミステリー

「算数の教科書を家に持って帰るのを忘れ、ある土曜日の夜、友達の磯岡さんの家に電話をして、取りに行くことになった。それは、もう真っ暗でシーンとして明かりがなく、人の気配がない時だった。こわいので、全速力で走った。着いたら磯岡さんの家には電話だけで、だれもいなくて、ドアがバー、バーに開いていた。しょうがないので、二階にかってに行ってさがして取った。そして帰りも、なんかだれかがついてくるような気がして、こわくて走った。でも道が変わっていて、走っても走っても家に着かなかった。すると後ろで「タッタッ」と足音がしたので、こわくてこわくて全速力で走ろうとした。でも声も出せないし、走ろうとしてもうまく足が動かず、足音が近付くだけ。がまんができなくなり、後ろを向いたら、いきなりナイフでさされた。なにがなんだか分からなくてさされたところを見ると、こまがたくさん出てきた。」

（玉川5年女子）

このように、「体感」としてのかなしばりは、後述する「次元」の呪術性と関わり合って意識されてくることが多い。

(4)「体の大きさの変化」

体が大きくなったり小さくなったりすることも、「次元」の「願望」や「夢の効能」と関わり合って、意識されている。

「私の見た夢は、大きくなったり、小さくなったりした夢です。「たまには大きくなりたいな」と思うと大きくなって、「やっぱり一番小さい方がいい」と思うと、さとうの一つぶみたいに小さくなって、「やっぱり中ぐらいがいいな」と思うと、先生ぐらいの大きさで、「もうちょっと小さいといいなあ」と思うと、6年生の小さい方になって、もうちょっとだと1年生ぐらいになって、なかなかふつうの自分の大きさになりません。だから、お母さんにどうしたらいいか聞きました。すると「今は1年生の大きさでしょう。だから、あと十センチメートル大きくなればいいんでしょう。だからあとは、自分で考えなさい。」と言いました。私は考えました。いくら考えてもわかりません。十分ぐらいしてから思いました。「あと十センチメートル大きくなあれ」と思いました。すると元の大きさになりました。」

（玉川3年女子）

この作文例は、自分の体の大きさの変化を扱っているが、一寸法師の打出の小槌のように、呪術性の伴うものもある。

「家でかっている犬を、私が笛でたたいてしまいました。そして犬をたたいているうちに、ずんずん大きくなって、私にくいついて、私が死んでしまう、という夢を見ました。」

（玉川6年女子）

(5)「体の中に入る」

「体感」として「体の中に入る」ことも、「構造」の中の特徴的な作文として挙げることができる。それはまた、後述する「夢の偏向性」の「骨肉」や「身体喪失」と関わってくるのである。

「不思議な夢は、四次元の世界に行ったことや、弟の体の中に入ったことや、弟がたくさん出てきたことでした。」

（玉川5年男子）

「動物園でサルに食べられて、お腹の中をずうっと行くと、ライオンがいてまた食べられて、また行くとジェットコースターがあって、それに乗って「ワー、助けてー」とさけんだら、自分の部屋にいました。」

（相模付属5年男子）

「体の中に入る」というイメージは、「穴」や「トンネル」の中を行く、言わば「肉体回帰」の願望とも関わってくるものであろう。次の作文も、球体に対するマイナス願望（恐れ）と「体の中に入る」とが結合した物であろう。

「ある日、いくらとうめぼしが出ました。私はいくらとうめぼしが大きらいです。その日にねたら、そのゆめを見ました。最初に私一人になってごはんを食べていました。そこには、いくらとうめぼしがあって、おかずはそれだけでした。でも食べられないので、ごはんだけ食べていました。そしたら、きらいないくらとうめぼしに、目と足と耳と鼻と歯とかみの毛と手が生えてきました。私はないて、おふとんの中ににげました。そしたら、半分に私がちぎれて、いくらの口とうめぼしの口の中に入っていきました。それでペロペロとなめられて、とってもおいしくて、ずっとなめていました。その日一日そこにいて、ずっとそこでくらすことになりました。でも起きたら、やっぱりきらいでした。」（玉川3年女子）

5 「次元」の中の夢の要素

前述したように、「次元」は、「夢を見ている意味」を感じ取ろうとする意識である。言い換えれば、今見ている夢には意味がある、とする意識である。

(1)「願望」と「効能」

①「正夢」

「次元」の中の「願望」として、第一に「正夢」が挙げられる。夢で見たことが現実となる、という意識は、そこにどういった「意味」を感じ取ろうとするのだろうか。

「正夢というのは、夢に見た事が本当に起こる事を言います。けれど、私の正夢は少しちがうのです。例えば、ある事があります。それから一年ほどすると、その事を夢に見るのです。また、ある夢に見たことを、一年ほどすると、本当にその事が起こったりするのです。そして、急にその事を思い出すのです。それが一ケ月に一、二回あります。例えば、私がハンカチを落とします。そんなのはぐうぜんだと思います。けれどちがうのです。わたしてくれた人、ハンカチのがら、全てが夢と同じなのです。ついこの間、私は学校で人とぶつかりました。そしてふと思ったのは、どこかで前、この人と同じようにぶつかったことはなかったかな、という事です。よくよく考えてみると、前このような夢を見たのです。」

（玉川5年女子）

この女子は、夢に見たことと実際に起こったこととが、偶然ではなく、何かを暗示しているのだ、と感じ取っているに違いない。その暗示しているものと実際とを符合させて、そこに夢の意味を見出しているのであろう。従って、実際に起こっている出来事は、自分の夢と符合させることによって、「現実」となっているのかもしれない。

「私の見た夢の中で、一番印象に残っているのは、正夢というもの。私はある夜、電車の網棚に、終業式なのか、沢山の荷物を置き、足元にも沢山の荷物を置いて、うとうとしていたら降りる駅になって、あわてて手ぶらで降りてしまい、その膨大な荷物をそっくり電車に置いてきてしまった。そしてすぐその事に気付き、持っていた定期券を駅のホームのベンチに置き、すぐ電車に飛び乗った。運良くその電車には、すべりこみセーフだった。私は周囲の人の視線を感じながら、せっせと荷作りをした。そして次の駅に着くと、すぐ反対側のホームまで走った。そして降りる駅に着くとドアがひらくが速いか、ベンチの上を見た。すると、定期入れの中のテレホンカードがなくなっていた。

そこで夢は終わった。目覚ましが鳴ったからだ。しかし、私はこの夢が正夢だとはちっとも思わなかったし、むしろ、「ずいぶんいやな夢を見たなあ」としか思わなかった。そして、その夢を見た日は雨だった。そして、私は学校への行きの電車の中にカサを忘れてきた。そしてそのまま気付かずに乗りかえて、その電車の中で友達が赤いカサを持って走って来た時に、はじめて気付いた。

あ、そうか。と、あの夢の意味が分かった時は、もうすでに遅すぎていた……。

これが私の初めて見た、そしてまだ一度しか見ていない正夢の思い出だ。そして私は思った。夢は注意して見ないといけないな、と……」

（聖徳5年女子）

「あの夢の意味が分かった時は、もうすでにおそすぎていた」という所が、おそらくこの子が最も書きたかったことで、暗示しているものと実際とが符合する所に「意味」があるのであろう。また、夢にはその暗示性を予感する働きがあるとも言えるだろう。または、人間のイメージそのものの働きが「効能」を期待しているとも言えるだろう。

「効能」とは、「お告げ」を聞こうとすることである。だからこの女子は、「夢は注意して見ないといけないな」と思ったのであろう。したがって、夢を見るとは、「お告げ」を聞こうとする働きであり、神様が「乗り移る」ことを期待する「効能」を表していると言える。次の作文は、その例である。

「バック転ができるようになったゆめだった。ふとまわりを見ると、砂場に立っていた。まわりにはだれもいない。ぼくだけだった。なぜ自分しかいないのだろうか。それは、ぼくがバック転をしなければならないさだめだったのかもしれない。そうして、何となくできるような気になってきた。そうしてまわりを見た。そうすると、女の子が自転車に乗ってどこからか帰ってきたような様子だった。それで、ぼくの魂がその女の子にのりうつったようで、砂場に立っているぼくを見ていた。そうして砂場に立ったぼくが「できるよー」と言った。何も分からず、バック転をやってしまったのだ。そこで目がさめてしまった。」

（高知5年男子）

②「約束事」

夢の「効能」はまた、～すると～になる、という夢の中の「約束事」と関連してくる。

「休み時間、ホールにある食堂で、みんなホットドッグを食べていたんだけど、私は食べると夢がさめると思って、食べなかった。」

（玉川6年女子）

「私の見た夢は、ある友達とUFOに乗って他の星へ行ったお話です。……（略）

パシェロという国へは、どうやったら行けるのでしょうか、と聞くと、返ってきた答えは、「あそこの一番はじ

にあるドアを行くと、行けますよ」と教えてくれました。そして、これだけは約束して下さい、と言いました。その約束は、

1、中に入ったら、物などには絶対にさわらない。

2、大きい声を出さない。

3、その部屋の中では十四歩以上歩かない。でした。

その人が理由を話そうとすると、パッとすがたが見えなくなってしまいました。中へ入ってみました。そうしたらその友達がついに花びんにさわってしまったのです。そうしたら戸があいて、すいこまれてしまいました。私たちは、宇宙にほうり出されてしまって地球へもどってきてしまいました。」

（玉川6年女子）

③「呪い」

前の「約束事」もそうであるが、してはならないことをしてしまう、またはタブーを犯してしまうことによって、呪われるという意識も、「次元」の中の特徴的な要素である。

「私が見たゆめは、おねえちゃんがラブラブ様とか星の王子様をやろうと言ってきて、私はしらなかったので、「それなあに」と聞いたら、「あのね、ラブラブ様ってゆうのはね。まどをあけてラブラブ様に、そのまどからお入り下さいって言うんだけどね。そのまえに、あいうえお、とかって書いた意味をおいて言うとボールペンがうごくんだよ。そして星の王子様は、おわったらかみの毛を一本ぬかないといけないの。」とおねえちゃんが言いました。

「でも、おねえちゃん、そういうのは、のろわれるんでしょ。だからやだ。」って私が言ったのに、おねえちゃんは、「いいじゃない。のろわれないよ。」と言いました。でも私は、「やっぱし、のろわれるよ」と言ったら、「へいき、へいき」と言いました。「でも、私やだな。のろわれたら、やだもん。」と思いました。「じゃあ、なっちゃん、やるよ」とおねえちゃんが言いました。私は「じゃあ、いいよ」といやなように言いました。そして、やったらのろわれませんでした。（のろわれなくてよかったな）」

（八王子3年女子）

「ねむって初めはとても楽しい夢だったのに、その夢はぱっと消えて、こわい夢になった。

私と小沢さん、内藤さんの三人が、何人かいる人の一番前でリーダー役のようだった。遠足に行くらしい。でもみんな何一つと持っていないの。私と小沢さんと内藤さんは、堂々と歩いていった。道路は広くて、とてもいい道路なのに、車も自転車も一台も通っていなかった。なんだかさびしい所。家もなくて、お店もなくて、私たち以外の人はだれもいないのだから。

歩いていると、私と小沢さんが自分のひざくらいの大きさのこけしを見付けた。二人で、内藤さんをおいて、こけしの方へ走った。そのこけしは、道の両側にずらりとならんでいた。二人で一番遠くのこけしの所に行くと、こけしをさわってみた。すると向かい側のこけしの細い目が、だんだんと大きくなり、私の方を向いた。目の黒い所が、だんだんと上に上って、目が白くなって、また元のこけしにもどった。私はこわくなって、こけしをけったり、たたいたりした。こけしは、こけてもすぐ起きてきた。

いつの間にか、小沢さんも来ていて、いっしょになってこけしをけったりしていた。何度目かこけしが起きて、目が大きくなって、それから目がとじずに手が生えて、みんなにのろいをかけて、笑っていた。のろいをかけられたせいか、速く歩けない。早く目的地に着こうということで、おにごっこをして行くことになった。ジャンケンで、おには内藤さんになった。なぜか内藤さんだけ足が速くて、だれもつかまえずに、一人で目的地に着いた。やっとみんな目的地に着いた。

そこに、自分の背と同じくらいの大きなこけしが立っていた。そのこけしが私たちの方を向いて笑い、目が大きくなって、目の黒い所が上に上って白くなった。私は、ぱっと目がさめた。手がふるえて、少しあせがでていた。」

（山口6年女子）

この例のように、女子の作文の中には、こけしや人形が夢の中で、呪うものとして出てくることがある。女の子が、小さい時から人形を持って遊ぶということは、「乗り移られる」ことを予感しているからなのだろうか。勿論、それがいつも「呪い」ではこまるのだが、親が子供に人形を与えるのは、子供をイメージ世界に住まわせることを直感しているからに違いない。

次の作文は、異類が出現することによって、「取り移られる」例である。

「身体象徴」

「ここは夢の中。玉川学園小学部五年桐組の教室に青い顔をした男の子が転入してきた。私は、気持ち悪いとは思ったが、声には出せなかった。次の日、クラスの人が、青いはん点のようなものが体にできたというので休んだ。その次の日も一人、そのまた次の日も一人。とうとうクラス全員がかかってしまった。そして一ケ月後、最初になった人をはじめ、次々と亡くなった。こわくてたえられなくなった私は、学校を抜けだし、家に帰った。すると、父も母も姉もあの青いはん点にかかったので、病院に運ばれたという。そこで、勇気を持ってまた学校へ行った。青い顔をした男の子は、「フフフフフ」とぶきみな笑い声を立てた。私は「キャー」とさけんだ。目をさましたが、頭の中でさっきの事がさまよっている。」

（玉川5年女子）

④「人格交換」

夢の中で、別の人格に変わってしまう、ということも「効能」のなかの特徴的な要素である。

「いやーなゆめなのに、なぜか覚えている。へんなゆめだった。おにみたいな女の人においかけられてたみたい。こわかった。にげていた。なぜかその場所はおばあちゃんち。キョンシーみたいに、その女の人に何かされると、自分もあんなになる。みんなそんなになって、私だけ残っていた。死にものぐるいで、にげていた。今思うと、へんなゆめ。あんなゆめ、早くわすれたい。今までわすれていたのに、また思い出しちゃった。」（高知5年女子）

この作文では「呪い」の要素が強いが、前述した「クローン人間」の作文例と同じように、次の作文では自分の人格を他の物と交換することによって、自分を外側から見ようとしているのではなかろうか。

「ある少年になっていて、テレビを見ていたら、テレビが急に使えなくなり、近くの空港になぜか行き、続きを見ていると、実際にテレビの中に入ってしまった。白かった服が青になっていて、林の中で、なぜか上にいた天ぐに大きな小石をぶつけられた。そうして天ぐは逃げていった。そうして進んでいくと、直径1mぐらいのはんいでしか動けなくなり、動けなくなった所を、落ちていた竹を切ったもので、思いっきりつきさした。すると貴族のようなかっこうをしている女の人が出てきて、水色に光る物を出して消えました。その光る物を拾うと、手がぬれて消えてしまいました。そうして前にも進むことができ、進むと天ぐが現れ竹を投げつけて羽にささった。……そうして目がさめた。意味の分からない夢だった。」（玉川6年男子）

(2)閉鎖・孤立

今までの作文例の中にもいくつか出てきたが、境界領域意識とあいまって、閉じ込められる感じや孤立感も、「次元」の中の特徴的な要素である。

「学校のしょくいん室の前を歩いていたら、体育かんがなくて、ただの草ぼうぼうになっている所で、しんだ人を入れるはこがおいてありました。そこにだれかしんだので、そこになげておいてあったと聞きました。そのはこの中に、なんとくまがねていたので、私はびっくりして、だんだんこわくなってきたので、私はいちもくさんににげて、いきました。こわくてこわくてしょうがなかったのです。教室にもどると、先生がチョーク入れみたいなはこをゆびさして言いました。「こっちは女の人がしんだら入れるはこ、こっちは男の人だ。」とへんなことを言ったので、私はぶるぶるふるえ、きいていて、「本当かな」と思いながらぶるぶるふるえていました。」（広島2年女子）

「前ぼくは、こわいゆめを見ました。ちょうどぼくがねむったすんぜんに、ガラス戸のガラガラという音がしたとおもったら、ふとんごとはこばれるような気になりました。でもそれがゆめのはじまりだとおもいます。そのゆめは、ばけもののせかいだとおもいます。そのとき、こえも出なかったので、たぶん、ふうじこまれたんだとおもいます。」（八王子3年男子）

「僕が寝ていた時、見たゆめの中で一番こわかったのは、あのゆめです。

それは、ある時、自分の家で真夜中、一人でマンガを読んでいました。この時から単独で、しんみりしていました。せんめん所にハエがいたのでころしました。その後、ちょっとしたら、電気が点めつし真っ暗になり、とてもこ独でさみしかった。いきなり、せんめん所から、とてもでかいがい骨が「イーヒッヒッイー」といってさけび声を上げた所で目をさましましたが、汗でびっしょりでした。」（玉川5年男子）

このように、夢の世界の特徴として、閉鎖性、もしくは孤立性があるということは、裏を返せば、「境界領域」で示したように、夢の世界構造は、一つの閉ざされた世界を持っていることになる。言わば、夢の世界は、遊園地のようなもので、その中では、悦楽感や恐怖感、空中遊泳感などを味わい、まさに「夢のような世界」に浸ることができる。しかしその世界は、どこまでも広がりを持つものではなくて、「遊園地」という閉ざされた世界での限りにおいてであり、夢も世界もまた、同じことであるということである。けれども両者の異なる点は、遊園地が意識的な世界構造であるのに対して、夢は無意識の世界構造を持つということである。

6 夢の偏向性

今まで述べてきたように、夢の世界の仕組みは「構造」と「次元」の両面性を持つものであり、その中でも取り分け「境界領域」意識や「彼我関係」意識、さらに「体感」や「お告げ」としての「効能」などに、その特徴を見てきた。そして、「遊園地」の中がそうであるように、夢の世界は現実の世界とは違って、普遍的で一般的な世界ではなく、多分に偏向的で特殊な世界と言えるのである。その偏向性を表すものの中でも、大変に特異なものとして、我々が注目したものに「骨肉食餌」と「身体欠損」とがある。

(1)「骨肉食餌」

「お姉ちゃんとねてたら、カリカリ変な音が聞こえてくる。それで見たら、女の子が白い物を食べている。「私のお母さん、死んじゃったの。だからお母さんの骨を食べてるの。そうすれば、

私の骨もじょうぶになるから。」と言った。」

（茨城3年女子）

現代人は、食物を食べて栄養を摂っていると考えるが、昔の人に言わせれば、その生き物の魂を食し、その生き物の力を得ようとした、ということになるのではなかろうか。この作文は、人間が本能として持っているこの性向を表しているのではないか。今でも「親の脛をかじる」と言う。なぜ「脛」でなければならないのかはつまびらかではないが、この作文のように「母が残してくれた体を食べて、子どもが強くなる」という本能があるからこそ、このような言葉が生まれたに違いない。また母親が子どもに乳を与えることもこの事の延長線上にあると考えられる。

このこととは逆に、母親に食べられてしまう作文例もある。子どもと親という立場が逆転しているが、自分に親しい者に食されるという点からすれば次の作文も「骨肉食餌」の例になる。

「私とおねえちゃんで、おふろばのきがえるところにかくれていました。そうしたら、お母ちゃんが追いかけてきて、その顔はなんと、目玉が二つともとび出ていて、ぐちゃぐちゃでした。

私とおねえちゃんは戸をしっかり持っていたけど、お母ちゃんのほうが力が強かったので、戸がこわれました。そのとき、どうしようかなと思った。

つかまれるところでしたが、おねえちゃんがドラエモンのポケットを持っていたので、小さくなるスモールライトがたすけてくれたので、せんめんじょの中にかくれようとすると、お母ちゃんがつかまえて食べている所で目がさめました。

そしてお母ちゃんとお父ちゃんへやに入ってみると、お母ちゃんはねむっていました。私はそのとき、ホッとして、また「いいゆめを見よっ」と心の中でぐっすりねむりました。」

（広島3年女子）

次の例は、親しい者に食べられるわけではないが、親しい者が「餌食」にされる点で似通っている。

「わたしのゆめは、ホテルに行って、へんな小人のおじさんがでてきて、いすのうえできゅうにおどって、みんなをたべてしまいました。いちばんさいしょにおにいちゃんをたべてしまいました。つぎにへんな人をたべてしまいました。そのときおかあさんといもうとはかくれていて、おかあさんといもうともたべられました。それでなんかしらないけど、わたしだけたべませんでした。それでわたしがびっくりすると、にらみました。こわかったです。」

（玉川2年女子）

「僕の見た夢は、死んで地獄に行って、地獄の亡者に首をとばされて、そして僕の首を地獄の亡者がおいしそうに焼いて、食べていました。近くには、学校の友達や先生がいました。友達も先生も僕と同じように首をはねられて、首を地獄の亡者に食べられていました。どうして、心に残ったかと言うと、本当は、ありえない事がおこったからです。」

（玉川3年男子）

(2)「身体欠損」

「ある日、私がいつものようにピアノをしていました。でもなぜか小指が上に上がらなかったのです。ようく見ていると、だんだんボヤけて、小指がなくなってしまいました。でもそこの所をさわってみると、ちゃんと小指の手ざわりがあるのです。きっとゆめだと思って、ほっぺたをつねってみたのです。「イタッ」いたいのです。ゆめではないのです。その時は家にはほかにだれもいなかったから、きみわるくなって、すぐピアノをしまって、テレビをつけました。するとだれか女の人の声がしたので、いそいでテレビを消しました。するとその人が、「ゆみ。七時だよ。」と言ったので、時計を見たら四時だったので、おかしいなと思いました。もう一度見たら、こんどは七時だったのです。私は小指を見ました。すると小指は元のようにもどっていたのです。そして私はパジャマを着ていたのです。いつもはゆめを見ない私でも、このゆめだけはおぼえています。あー、ほんとのことじゃなくてよかった。」

（成瀬台3年女子）

自分の体の一部が欠損してしまうことに対しては、これまた本能的な人間のイメージが働いているに違いない。つまり、人間の肉体自体が大変片寄った好みを持っていることを表しているのではなかろうか。だから、夢の中の身体の欠損は、手足や顔、目、心臓といった部分的な所に集中している。

「どこかへ行くとちゅう、へんな通り魔のおじさんみたいな人が、フフフ、とわらいながら通りすぎていった。私はこわくなって、いそいでにげようとした。そしたらそのおじさんがいきなり追いかけてきて、私をつかまえてナイフを出した。私はこわくなってにげようとしたんだけど、そのおじさんはつかまえてはなしてくれなかった。口もおさえられて、なんかゴチャゴチャいっている間に、いきなり私のことをギザギザにころした。それで心ぞうを取り出して、私のことをほっぽり出してにげていってしまった。その時、私は心ぞうといちょうを取られたんだけど、起き上がって家にもどっていった。そこで一日目の夜はおわったんだけど、その次の日にまたその夢のつづきをみた。

家に帰ったら自分は死んでいた。お母さんたちはおそう式もなんにもしてくれなくて、そのままどこかへすてられた。そしたらお母さんたちは、子どもが産まれていて、あたしのことなんか、これっぽっちもおぼえていなくて、その子どもと幸せにくらしていたという所で夢は終わった。」（茨城6年女子）

このように見てくると、人間の肉体意識そのものに片寄りがあり、その肉体意識をベースにした人間のイメージも偏向性を示すことになるのだろうか。

7 その他のサンプル作文

●死について

「ぼくは、その夢の中では少し成長していた。その時の僕は死んだのだった。僕は自動車にひかれてしまった。でもそう死んでしまうと、とてもいい気持ちになった。でもどうしてもあの世の入り口はあるのだが、行きたくはなかった。死んでしまった僕は、体とは別々になり、空を飛べたのだった。それからまず空を飛んで、家族の所へ行った。僕は体がなかったので、かべにもぶつからず、そのまま通っていけた。でもいくら話しても母たちは知らんぷりであった。ぼくはあきらめ、あの世へ行った。

あの世もこの世のように体があった。そしてその時の僕は、9才ぐらいの少年であった。あの世は進んでいて、いろんな機械があったが、明るくなく暗かった。太陽がなかったのだ。人も少なく、ぼくの周りには人一人としていなかった。とてもさびしかった。僕は機械をいじってみた。その機械は穴をほる機械だった。機械はどんどん穴をほった。ついつい見ることにした。それからどんだけ時間がたったのかわからなかった。もう1週間をこしてしまったかもしれない。けれどもおなかもすかなかったし、のどもかわかなかった。またうちにいってみた。それからおかしい事に気が付いた。土にさわれないのだった。またぼくは死んでしまっていた。今度は、あの世のあの世行き。その入り口に僕は入った。

そのあの世のあの世とは、この世だったのだ。けれどもその時起きて、その夢とはおさらばしていた。」

（聖徳5年男子）

「僕は今日の明け方、自分が武士になり、悪人をせいばいしたり、又めぐまれない人のために、無料の病院を作ったりしましたが、最後には悪人と合い打ちで死んだしゅんかんに、目が覚めました。時計を見たら、三時だったので又ねました。

その後、またゆめを見ました。そのゆめは、自分がもも太郎になり、おにがしまに行きました。そしたら、赤おにが赤おににおきろ、おきろとすごい声を出していました。その後、おにの城にのりこみ、赤おにを三人たおしましたが、足がすべってがけから落ちてしまいました。そして目が覚めたのです。僕がお母さんの所へ行くと、お母さんが、何回起こしても起きなかったわよ、と言いました。さっき、ゆめでおにがおきろおきろと言ったのは、お母さんだったのかなあと思いました。そして僕はいつも、夢の最後に死ぬのです。さっきもがけから落ちて死んだし、その前も合い打ちで死にました。たまには、死なない夢を見たいです。」

（玉川5年男子）

「私の見た夢は、平林さんと私が死んでいた夢でした。平林さんと話をしてたら、下の方で泣き声が聞こえました。私達の写真の前で欅組の人や家族の人が泣いていました。私達は、わけを聞こうと思って、幸田さんのかたをたたいたけれど、無視していました。私達はわけがわかんなくって、近くにあった紙と鉛筆で「どうしてみんな泣いているの。幸田さんへ。渡辺一美さんと平林朋さんより」と書き、下へ落としました。すると幸田さんがその紙を見ておどろいていました。そしてみんなに紙を見せていました。私達の姿はみんなにはわからないけど、紙と鉛筆を持っていたので、みんなに私達がどこにいるか教えられました。

それから毎日、私達は文通していました。そのうち四十九日になっていて、自分たちは死んでいたと言う事がわかりました。暗い道をずっと二人で歩いていくと、天国の使者とじごくの使者がいました。私達は天国へ行くことになったので、手紙をみんなにわたしました。「ちょっと天国へ行ってきます。心配しないで下さい。」と書いて天国へ行きました。

夢の中では、自分がみんなに無視されていて、私はみんなの声が聞こえて、みんなには私の書いた文でしか伝えられないので、変だと思っていた。気持ちは、死んだとわかった時、どうして文通できたか、不思議でした。」

（玉川6年女子）

◎夢作文調査協力校・上の（　）内は本文中の学校名

（聖徳）東京・聖徳学園小学校1～6年（136名）

（玉川）東京・玉川学園小学部2～6年（211名）

（山口）山口・光市立三井小学校5～6年（60名）

（広島）広島・府中市立栗生小学校3～5年（76名）

（成瀬台）東京・町田市立成瀬台小学校1～3年（129名）

（茨城）茨城・六郷小学校3年・6年（70名）

（八王子）東京・八王子第六小学校3年（65名）

（高知）高知・鴨田小学校5年（39名）

（東小田）神奈川・川崎市立東小田小学校5年（36名）

（相模付属）神奈川・相模女子大学小学部2～5年

横浜・港南台第二小学校3年（34名）

横浜・名瀬小学校4年（44名）

（東京・玉川学園小学部教諭）